私の戦争体験

第14集

いずみ

特集号

1992年8月

こどもの明るい未来のために語り継ぎます

COOP

いずみ市民生協

「幽霊じゃないよ ホラ足があるでしょう」

鶴山台支部　永宮　美都

一九四五年六月七日、私は動員されている女学生達と共に或る工場にいた。

空襲警報が鳴り、馴れたいつもの防空壕に生徒を避難させようとした。ところが学年主任が「あれは危ない、淀川の堤防に行こう」といわれる。壕が地下に設けられているから地上が燃えたら蒸し焼きになる恐れがある、といわれればその通りだ。指示通り、百人ばかりの生徒と共に淀川に向かって急ぎ走った。後できいたことだが、その日は淀川の北岸の柴島水源地と南岸にある工場群が米軍の目標であったということである。

私達は何の被いもない河川敷に身を縮めてうつぶせるばかり。恐らくB29からは、蟻が這っているように見えるだろう。

やがて南方から爆音が近付いてくる。音はどんどん早まる。体がこちこちに固くなる。ヒュルヒュルヒュル……焼夷弾がうなりを発して落ちてくる。二米ばかり先の川にプスップスッと音を立てる。この次は自分の上か……と全く生きた心地もしない。ダダダダ……機銃掃射だ。突然、地響きと共に小型爆弾が炸裂し、悲鳴があたりに充ちる。小石や砂が雨のように降りかかる。ただ編隊が遠ざかるのを祈る思いで待つばかり。通り過ぎると、ああ今回は無事だったと一瞬ほっとする。しかし絨緞爆撃は空の端から端まで絨緞を織るように続けられるのだ。他の人の安否も見る余裕なく悲鳴だけが唯一の生存の証しである。こちらも励ましの叫びが精一杯。投下は繰り返し飽くことなく続く。その日は特に執拗に広範囲に行われたようである。編隊は一次や二次ではとても続かない。

ようやく投下物も種がつきたのか、全機が去ってあたりに静けさが戻った頃、空襲警報解除のサイレンが響き、息を詰めていた生徒達は魂の抜けた顔で立上がった。全員を集めて番号をかけさせ、欠けた人がいないか息の詰まる思いで、最後になって全員無事が確かめられた時、私達はおどり上って喜び合った。学年主任の判断は正しかった。燃える工場を眺め、あの下にいたらとぞっとした。しかし我に返って遥か周囲を見廻すと、私達は大きな火の輪にとりかこまれている。この火の輪をどうして通過できるだろうかと不安がおそう。空襲のあと必ず起こる夕暮のような暗さ、その中を不気味な風がざわざわと吹き、まっ黒い雨が衣服を点々と染める。生徒の中には、落下した石で負傷した人もいる。交通機関の途絶した今、北区毛馬町から西区の白髪橋近くの学校まで何粁あるか相当の道を歩いて帰らねばならない。学年主任は、若い男性教師と私に怪我人五名を託し残りの人達を連れて出発した。泣きたくなる思いで両肩に生徒を抱え痛がるのを励まし励まし歩くが、果していつ帰れることだろう。

道々、亡くなった人が土の上に横たわり、家族がとりすがって泣き叫ぶ光景が次から次へと続く。ふと薄暗い草原に異様な光景が見える。うら若い女性があらぬ眼付きで唄いながら気味悪い風と戯れるように舞っている。極度の恐怖が続いて気が触れたのだろう。まわりをとりまく凄惨な風景の中で、その舞は身の毛もよだつ光景だった。

私達はやっと川から離れて大通りに出た。よろよろ歩く姿を見兼ねたのか、空の荷馬車のあるじが「どこまでいくのや？」ときいて下さった。「白髪橋です。」と答えると「それは大変や。わしもそっちの方やから乗っていき」と、まるで地獄で仏に会ったように私達は馬の曳く車に乗せてもらうことになった。今までが嘘のようにどんどん進む。しかし時には、家がボウボウ燃えている横のごく細い道を、今にも家が倒れてくるのではないかとひやひやする思いで走り抜けたこともある。こうして私達は幸運に恵まれて帰ることが出来た。外の生徒達も帰り、私達が家路に就いたのはもうすっかり暗くなってからである。十一時過ぎから昼食もとれずふらふらの体で、のろのろ留まりつつ進む電車で南河内の家に帰ったのは午後十時を廻っていたと思う。這うようにして灯火管制の暗い玄関に辿り着き「ただいまー」というや否や奥からバタバタと祖母が走ってきた。「お美都か？幽霊と違うか？」いつもの冷静さもなく喰い入るような目付きで真剣そのもの。多分ラジオの報道をきいて案じ、大阪から帰宅した叔父が私の行っている所が目標だと話してショックを受けたのだろう。夕方になっても帰らぬ私がてっきりやられたと思うのも当然だ。

幼い日に両親が亡くなってから一人で育ててくれた祖母である。心中いかばかりだったろう。

「幽霊じゃないよ。ホラ足があるでしょう？」私はわざとおどけて重い足で足踏みをして見せた。「うんうん」祖母は涙声でうなずき、ほっと安堵の顔にもどった。

もう二度と味わいたくない、誰にも味わってほしくない体験である。

大阪の戦跡を訪ねて

大阪の空襲は一九四四年十二月七日を最初に計五十数回を数えました。特に一九四五年三月十三日の夜半から十四日未明にかけての空襲は港区・浪速区・南区などの大阪市の中心部を壊滅状態にしました。敗戦までの九カ月で死者が四万六千名にのぼったのです。

あれから四七年がたち、人の記憶が薄れいくのと比例して、当時を物語るものも日々減っていきます。今に残る遺跡を幾つか拾ってみました。

「ずれが生じた大阪城」天守閣の石垣

大阪城周辺には重要な軍施設が集中していたので、一九四五年八月十四日、一四五機のB29による最後の空襲を受け、壊滅状態になったのです。天守閣の屋根には焼夷弾が、石垣には一トン爆弾二発が命中して西南隅と東北隅の積石の一部が吹っ飛び、ずれが生じました。そのずれが今も天守閣東側に見られます。

病院船を使って決死の武器輸送

新家支部　松浦　正三郎

軍隊生活の一部分でありますが、敗戦も真近かな出来事を記憶も段々薄らぐこの頃ですが、思い出すがままに書いてみました。

豪北派遣軍（旧広島五師団）、鯉五一七三部隊（旧十一聯大隊）第二大隊と一部山口部隊総勢、約一、八〇〇人程度が軍命によってニューギニア南部より、ビルマ前戦増援の為に転出を命ぜられる。当部隊はオーストラリアの北部に位置する、アラフラ海域すなわち、ケイ諸島、アール諸島、タニンバル諸島の島々を転々とし、豪州作戦攻略の最前線で塹壕や蛸つぼ、陣地構築、其の他仮の飛行場の設営に兵補（現地人採用の若者、敵の捕虜）等と共に従事する。昭和十八年の暮れ頃から極度に戦況が悪化し、内地からの物資補給もとだえ、したがって現地での自給自足耐乏生活をよぎなくし、ジャングル内で原始的生活が始まりました。

ところが珊瑚礁のため、野菜や穀類其の他の作物が殆ど作れず、自然消滅になり、栄養失調で倒れる者が多く続発した。第四野戦病院や分院等も完全に満員で余程の重症患者で無い限りなかなか入院は出来ませんでした。特にマラリアと心臓脚気を併発すると元気な姿で就床し朝起きるまでに何時のまにか屍になって実に安楽に冥途に行かれるのです。隣に寝て居ても途中で全くわからない。朝の起床には、既に体が硬直した状態になって尊い生命が又失われて行くのです。酷くなると約三十糎程の高さにも片足を自分で上に揚げるのにも容易でなく、床に這い上がるのも人の手をかりなければ幾ら本人が努力しても床の上にあがる事すら出来ないのです。野菜の不足からが原因の一つ。人間は草食動物です。基本的な事が大切ですが、野菜の摂取すら出来得ずに誠に残念でした。食事に関しては余りにもひどいので、書く事を差控えます。御容赦下さい。当然、戦闘意識がなくなり闘争心がなければ死を覚悟せねばならないのです。

過去にシンガポール（昭南島）攻略作戦に於て主力部隊が甚大なる功績を買われ今回の処置が取られたのであります。ジャワ島で一時休養のため輸送方法として、もっとも安全と思われるところの国際法違反を承知の上で秘策をこらして、戦前の伊豆大島通いの客船橘丸を急遽改造して病院船に仕立て使用する。乗船二日前に過去に入院した者のカルテを貰い、一日で暗記させられて、負傷兵又傷病兵として擬装、病衣を着用して船に乗り込んだ。

其の間に、兵器、弾薬、被服、糧秣、衛生材料、若干を梱包し赤十字のマークを入れて順序良く積み込み、ジャワ島に向って出航した。途中で一番恐れていた事が洋上で起きた。それはアメリカ海軍の駆逐艦により停船を命ぜられ臨検を受けました。

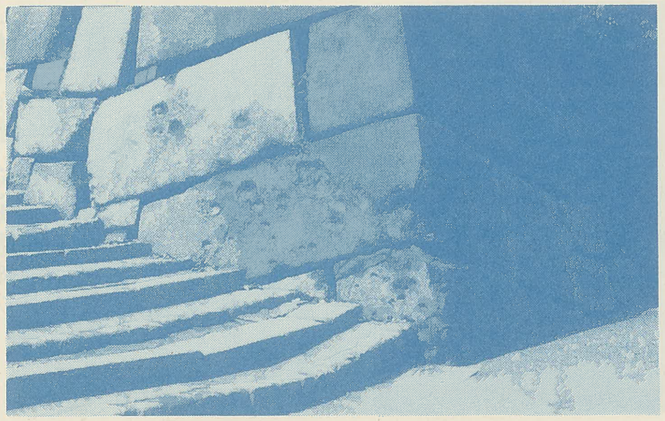
其の後ただちに拿捕される。（昭和二十年七月）全員が騒然となる、実は乗船前に輸送指揮官より発覚すれば即時に自爆装置によって船諸共運命を共にする仕掛けになっている事を聴かされていたのである。横づけのまま軍医や完全武装のアメリカ兵数人が乗り込んで銃を構えて取調べが始まった。何度も何度も「もう駄目だ」と「其の日が我々の命日である」と全員が観念し、覚悟をしたものだった。幸にして、敵軍の好判断によって救助される。其の後フィリピン群島のモロタイ島に曳航される（八月上旬）。田圃の中に仮のバリケートを設けて厳重な監視のもとに抑留された。其の間に内地の敗戦を聴く（八月二十日）。信じられなかった。二世によって再度詳しく説明を得る。

其の折に広島市の原子爆弾による写真で被害の大きさを知る。爾後、陸軍側が干渉し司令部のあるルソン島マニラに病院船橘丸（消毒済）と輸送船をつかって二回に分けて単独でマニラ港に着き、直ちに天蓋のない貨物列車によって陸送中現地人に猛烈な被害を受ける。フィリピン駐屯の皇軍の残酷な行為が現住民の対日感情を悪化させた原因であろう。

ようやくの事でモンテンルパ刑務所に辿り着き、早速、一応の軍歴関係の取調べを入念に受けて、其の後各地の捕虜収容所に分散して内地からの引揚船の到来を待つ。其の間にマニラ復興作業に従事する。（第一回二十年十月～十二月）二回目の引揚開始により（二十二年正月）戦犯者を除くフィリピン最後の引揚船筑紫丸で看護婦数名を含む数百名が博多港に帰国上陸する。懐しい祖国の松並木の島や辺りの風景又埠頭での島田髪の女性の姿を見て自然と涙が止めどもなく流れるのを覚えた。久し振りの祖国に帰れて良かったと感謝や又一生忘れられない重圧を身に感じ乍ら、現役兵としての敗戦の責任と終生忘れられない数々の出来事が走馬燈の如く脳裏をかすめる。

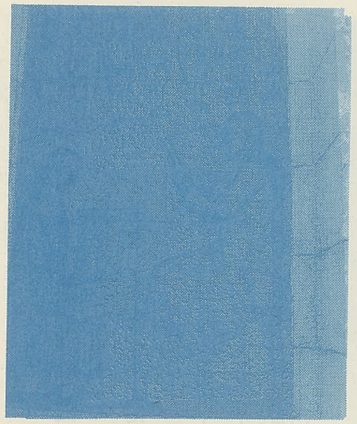
日本軍の最後の足掻で大本営参謀本部での輸送船団も組めずに、病院船を使っての策動で独断的なやり方で切り抜けようとする行為は決して許されない事でもあるし又愚かな戦い方でも

大阪城　山里曲輪の石垣の弾痕



大阪城の山里曲輪は豊臣秀頼の自刃の跡とされている場所ですが、その石垣の角が大きく欠け、最大直径三十cm位の機銃掃射によるものとみられる弾痕が残っています。

大阪城　教育塔



大阪城公園の大手前広場の南隅に、高さ三十mの教育の塔が聳えています。一八七二年の学制発布以来、殉職した教職員と授業時間内に不慮の災害で死亡した児童・生徒・学生と特別に戦争中勤労動員中に空襲などにより死亡した大阪府下の教職員・学生・生徒一二六名が合葬されています。

碑の台座に二つのレリーフがあり、向かって左は大風水害下で児童を守る教師の姿を。右は祝日の式典で児童を整列させて「教育勅語」を捧読する光景が刻まれています。

天皇を神と教えた教育が今も息づいているようです。

ある。連隊長は終戦と同時に責任を痛感して自らジャワ島に於て連隊旗の傍で潔ぎよく自決された。（官姓名は省く。）

戦争体験が次第に風化しかかった今日戦争を知らない世代が多数になった今こそ、歴史を見直す事が生き残った者の務めであり、戦没者に対する報いる道でもある事を決して忘却してはならないと思います。

かつて日露戦争の最中に輸送船、日立丸が将兵員を乗せ日本海を航行中に敵の攻撃を受け悲しくも全員が海の藻屑（もくず）と消え痛ましい事件は御承知の通り。今でも琵琶歌等でも語り継がれて居りますが、もし仮に橘丸が最悪な経過を辿るならば、またしても日立丸橘丸事件として国際法違反のレッテルを張られ大きく歴史の上に汚点を残しクローズアップされたであろう。侵略的な戦争程、善良な民衆を犠牲にして、其の結果が余りにも残酷でそうして悲惨なる代償にほかならないのであります。平和こそ我々の願いです。どうか、平和運動を進める上で、平和の声を大きく高らかに頑張りましょう。少しでも皆様方の参考資料になれば幸甚の至に存じます。最後に会の益々発展を蔭ながらお祈り致します。

合掌

歪められた学校教育

高石支部　吉田　照子

何しろ、五十年近くも昔の事なので、年を経るにしたがって記憶はうすれて行き、その上、思い出したくない事でもあります。いやな思い出ばかりですが、語り継ぐことが、あの時代を生きた者の義務のようにも思います。教え子や孫たちを、決して戦場へ行かせてはならないと思い、書くことにしました。ほんの一部だけですが、心に強烈に残っている事だけを書き残します。

教科書を墨で塗ったという事は、たびたびニュースできくでしょうが、それを実際に使った者として、例えば

「[redacted]は、[redacted]の天皇を[redacted]です。」とか、

「明治二七～八年、明治三七～八年、の[redacted]には、[redacted]しました。このたびの[redacted]でも、[redacted]は、数々の[redacted]を挙げています。」

何が書いてあるのかわかりますか？これを、どう教えよ、というのでしょうか。主語がなくて、文章が読めますか。まして、それを説明するなど、出来ません。上からの圧力に、どうしようもありませんでした。それにただ墨を塗る、といっても、勝手にするわけではありません。決められた箇所を、一斉に何時間もかけて作業するのです。時間のムダをして、わけのわからないことを、やらせられたのです。

消したところには、こう書いてあったのです。

「大日本帝国は、萬世一系の天皇を神と仰ぐ神国です。」

「明治二七～八年、明治三七～八年、の日清日露の戦争には、大勝しました。このたびの大東亜聖戦でも、我が陸海軍は、数々の戦果を挙げています。」

当時の教科書は、紙質も悪く、色刷りでもありません。だから、墨でまっくろ、心もまっくろ、教室中まっくろでした。

その上、MPが来たら、机の中にかくすように、と云われました。落ちついて勉強できるわけがありません。実際、MPは、ジープに乗ってやって来ました。でも、子供達と楽しそうに遊び、にこやかに帰って行きました。今まで何のために時間をさいて来たのか、これでよいのだろうか？と疑問を持ちましたが、それを云うと、「レッドパージ」にかかります。私の学校でも、二人の先生が、わけのわからないまま、即、退職させられました。

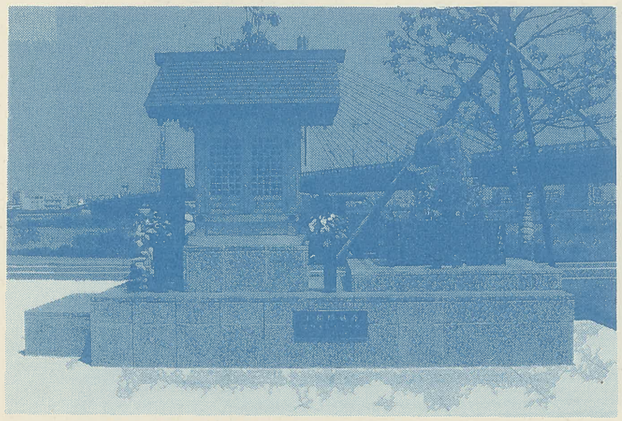
私達は、その時、すでに死を覚悟していました。今まで生きていようとは思いもよりませんでした。余りの人生なのです。

小学生の頃から、国定教科書で、くり返し、くり返し、頭の中にたたき込まれたことは、今でも鮮明に覚えています。おそろしいことです。いわゆる、洗脳ですね。大きな力にまきこまれ、それを疑うことすら許されず、だまって受け入れざるを得なかったなんて。今なら居ながらにして、世界中の出来事が、すぐにニュースとして知らされるのに、当時は、その大きな力の何であるかもわからず、その動きや考え方を知る事は、とうてい不可能でした。

千人塚と平和地蔵

大阪市旭区生江三丁目
（市バス城北公園下車）

一九四五年六月七日、大阪市北東部を爆撃した四〇九機のB29は、二五九四トンの爆弾・焼夷弾を投下し、七七二一名の死傷者を出しました。空襲時の避難場所になっていた城北公園では千名以上の人が亡くなっています。淀川堤に慰霊の千人塚と平和地蔵が建立されました。今も供物や線香が絶えることがありません。



入場無料

'92平和のための大阪の

戦争展

8月1日(土)～9日(日)
大阪市浪速区新世界・通天閣

核兵器廃絶と平和の願いをこめ、「戦争展」が今年も開かれます。

今回の展示には、「海外には派兵より、平和憲法を送りたい」の思いをこめて、アジア侵略の謝罪、内外の戦時補償と永久記録をめざして「日本は朝鮮で何をしたのか」「日本は中国で何をしたのか」「侵略謝罪と戦時補償」「十五年戦争と大阪府民のくらし」などを展示しています。

●展示場での主な催しものは……
○クイズで「平和博士」号を授与
○ビデオ・折り紙コーナー
○短歌・俳句投句コーナー
○戦時食試食コーナー
○証言・平和ステージ
など、いっぱいです。

従軍慰安婦や、細菌攻略部隊の事などと同じように、今だからこそ云えることなのです。思ったことが、はっきり云えたなら、こんな苦しい思い出はなくてすんだのに、たくさんの優秀な人材を失わなくてよかったのに、もっと住みよい世の中を作れただろうに、と惜しまれてなりません。

だから決して、私共の轍を踏まないよう、これからの子供を育てているお母さん方に、お願いします。戦争は絶対してはなりません。

苦労した買い出し

原山台支部　中川　園子

昨年の八月、当時八十一才の明治生まれの母は、持病をこじらし重い脱水症をおこして救急病院に入院致しました。残暑の続く中、私は病院へ向かう地下鉄の中で、戦争体験記を読みながら、涙で顔をくしゃくしゃにしていました。ふとその時、ベッドで横になっている母の顔が浮かんできました。日頃何かにつけて「勿体ない。勿体ない。」といい加減捨ててもいい物を、大事にとっておく母を、歯がゆく感じておりましたが、物資の乏しい時代を生き抜いてきたのですから、母がそう言うのも無理からぬ事なんだと思いました。お陰様で母は、無事退院して現在がんばって余生を生きております。

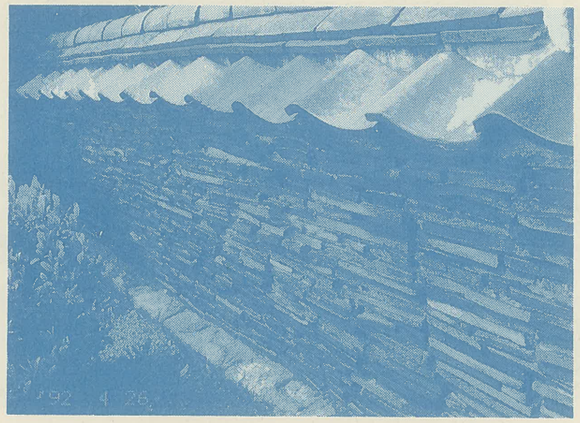
「実際、戦争の被害を最も受けた、広島、長崎、沖縄そして東京大空襲に比べたら私なんか幸せな方や。戦争体験記に書く程の事でもないわ。」と母は言います。そんな母から、遠い昔の記憶をまとめてみました。母は福井県出身の父と結婚して、大阪市内で暮していました。大阪市東成区は、空襲に依る被害も少なく近所の方達も皆無事だったようです。「家から歩けば十分程の東大阪市の長栄寺附近に、B29が墜落した時は、怖かった。焼けただれたアメリカ人兵士の死体が、ガスでパンパンにふくれあがっていたわ。」と。この事は、忘れられなかった様です。比較的恵まれていた母にも悲しむべき事実がありました。次男の勝ちゃんが、寒い冬の二月に麻疹（はしか）にかかりました。防空演習の為、家の窓や戸はすべて開けておかなくてはいけないし、看病も出来ず、薬も手に入らず、肺炎を併発して一才三ヶ月で亡くなりました。今生きていたら四十九才の社会を支えているりっぱな大人です。母は、この次男の事が最近よく思い出されると言います。当時こういう事は、あまり珍しい事ではなかった様です。

戦争はどんどんひどくなるばかりで、食糧も配給では足らなくなり、亡父は徴用で名古屋に来ていた兄（私の叔父）を伝(つて)に、買い出しに行きました。行けば、いもや粉になっていない小麦が手に入ったそうです。その時父は、名古屋空襲に会い、熱田神宮の床の下に避難して、命拾いしたそうです。父は体格がない為徴兵にとられませんでしたが、その父も今から十六年前、難病にかかって亡くなりました。

父方の福井の叔母は、当時虎姫という所に疎開していました。お米を一俵買ってもらっていて、月一回、お米を取りに行ったそうです。父が買い出しにいくと、いつも検査にひっかかってすべて没収されたそうですが、母が行くとうまくごまかせたと得意そうに言うので、その理由を聞くと「六ヶ月の美智子（私の姉）をおんぶして、腰に二升、おむつの中に六升隠して、下げて帰って来たのや。美智ちゃんは、おしりにお米があたって冷たいので、列車の中で泣き通しやったわ。」と。買い出し列車は身動き出来ない混雑で、トイレは列車の窓から用を足すという光景は、あたり前だったそうです。しかし本土空襲は、ますます激化するばかりで、警戒警報がひっきりなしに鳴っていたそうです。昭和二十年三月、六才の私の兄と十ヶ月になっていた姉をおんぶして縁故疎開、いわゆる母の実家の奈良大和へ疎開しました。大和は戦火を免れましたが、見上げる空は、着物の絣の模様と同じで、和歌山方面から飛んで来る戦闘機で埋めつくされていたそうです。疎開先の山の畑で母達は、そばを栽培しましたが、収穫する事もなく終戦をむかえました。

母達が大阪へ帰って来ると、雑草という雑草は見たくてもなかったそうです。疎開先のなかった人達が、食糧として雑草で飢えをしのいできたからでした。田畑の土手は、丸坊主で、はこべはその中でも比較的おいしかったらしいです。

残されて、家を任された女達は、まさしく飢えとの戦いの歴史でした。こうして母達の食糧を確保する時代はすぎ去りました。



崇禅寺(そうぜんじ)（空襲で焼けた瓦）
大阪市東淀川区東中島
（阪急京都線崇禅寺下車）

細川ガラシャ夫人の墓所で有名なこの寺も一九四五年六月七日の空襲で全焼しました。被災死した近隣の人々五一八名を埋葬した慰霊塔が有志の人々の志しで建てられています。

空襲で焼けた瓦を積み上げて築いた塀が方丈の庭を囲んでいます。

崇禅寺・境内の墓地

境内の墓地には、空襲で焼けて変色した墓石が幾十基と並んでいます。一部分がなくなったもの、触れればポロポロ崩れ落ちそうないたいたしさです。

母は、昔はあーだったとか、今の若い人は苦労が足りないとかいった説教がましい事はあまり言わない人です。母は私だけが、苦労したのじゃない、あの激動の時代を生き抜いてきた人は、皆そうなのだからと言います。

私自身といえば、朝鮮動乱が勃発した六月に生まれ、戦争の悲惨な体験は皆無です。しかしそんな私も戦後の名残を味わっています。学校給食に出された脱脂粉乳のミルクです。私は多分、鼻をつまんで飲んだか、残した様に思います。定かではないですが、ユニセフからの供給ミルクだという事を知った時は、胸があつくなりました。

姉達の年代が一番ユニセフのお世話になったみたいです。又近所の友達と「安保反対。安保反対。」と掛け声をあげて、デモ隊のまねをして遊んだ記憶があります。この言葉の重さも知らず、たわいなく遊んでいました。この頃には、経済も回復し高度成長の道を歩み始めて、今日の豊かな日本に成長していました。私は正直、戦後の日本に生まれて、大変幸せだと痛感しております。私達世代は、大きな財産を譲り受けました。戦争という大きな犠牲の上に成り立っている〝平和〟という貴重な財産を、壊される事なく次の世代へ受け継がれていく事を念じて……。

旧満州の地で同胞の死を見つめて

鴻池支部　藤井　清一

戦争を思う時、私はいつも戦争の悲惨と虚しさを思い浮かべます。下手な筆致で書くまでもなく、日本でも戦場と変わらぬ飢えと悲しみを体験された方も多い事と思います。

雨にうたれ風に晒されながら、敵の銃砲弾が雨飛する中で、奇声を上げて倒れる戦友を後に進まねばならぬ身は、敵を殺さねば自分が殺される運命に、ただ夢中で身を伏せて突進した。

この一言に尽きるでしょう。

一部の野望ある為政者のために、幾百万の犠牲者を出し、いや日本全土は戦場と化し、飢えと悲しみの中で、日本は廃虚の町となりました。再び戦争の愚を犯さぬように、再び戦争の悲しみをしないように、互いに力を合わせて日本の平和を護ろうではありませんか。

「忙中閑あり」とか言います。戦塵の中にも、心やすまる中国の風情をお話しします。

皆さんは〝支那の夜〟と言う歌をご存じでしょうか。中支にはクリーク（水路）が大小縦横に延びています。そのクリークに沿って舟で荷を運んで、生活をしている人達がいます。部落を〝鎮〟と言いましたが、夕方舟が鎮に着くと、主人は舟を岸に繋ぎ、荷崩れなどを見て廻る。主婦は夕餉の支度で、台所は忙しい。細い煙突から紫煙が上がる。

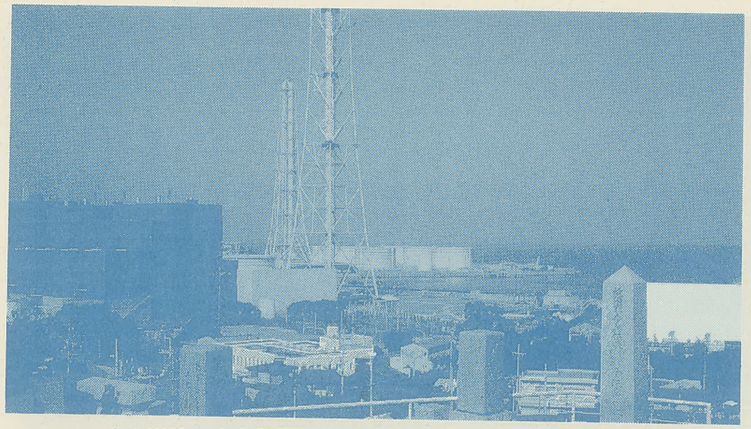
どこの家庭でもそうでしょうが、娘さんは一通り手伝いを済ますと、赤や紫色の支那服を着て、舟の高台に腰をかけて胡弓（楽器）を弾くのです。あの音色の高い調べから哀愁をそそる曲は、何の調べか知りませんが、戦塵の身をどれほど慰めてくれた事でしょう。

その頃になると鎮の家々からランタンの灯が点もされ、その灯がクリークのサザ波に映え、胡弓の音曲と共に〝支那の夜〟の風情に誘い込まれたものでした。皆さん、戦争の話はやめて、中国の情緒に耽りませう。

私は旧満州の北安の部隊にいました。日本は空襲だと言うのに、ここは平和な天地でした。そんな申し訳のない思いが、炎天の下で敵の戦車に爆雷を抱えて体当りの演習に熱中していました。が、八月十五日に終戦となり、体当りの演習も役立たず、武装解除と共に捕虜になったのです。ソ軍の兵に腕時計など奪われ、ソ満国境の黒河まで歩かされました。八月の満州はまだ暑かった。それに反して夜は気温がグンと下がった。少量の粟や大豆で飢えと渇きをしのいだが、疲労と栄養失調で幾人かの捕虜は倒れ、恐らく今は白骨化して土中に埋まっていると思う。

黒河から貨車で山奥へ送られ、その日から労働を強いられた。気温は零下十五度に下がって、日毎に二度三度と下がっていった。作業は山を削って湿地に堤防を築き、その上に鉄路を敷くのである。焚火はするが一メートルも離れたら、そこは冬将軍の地域である。ノルマの国は作業が遅れると、夜間作業に駆り立てた。削る山はコンクリートを砕くようなもので、その砕く事で体温を保ったものだ。

作業の種類は多い。どんな作業でもやらされた。吹雪の中で、怒声の中で、凍傷を防ぐために鼻を擦りながら。ラーゲリの移動があって、親しい仲間と髭面を合わせ、泣いて別れた事も虜収容所多奈川分所があり、アメリカやオランダの捕虜三百数十名を収容していました。又谷川港近くの小高い畑地には朝鮮人強制収容所とみられる、建物の土台の遺構がかなりの広さで残っています。これら捕虜・朝鮮人そして堺市にある大阪刑務所の囚人を労働者として、潜水艦や海防艦などを建造させていたと言われています。



多奈川第２火力発電所（1969年に埋立された地に建設）

一九四四年七月東条内閣最後の閣議で「全国地下工場建設の大綱」を決定しました。サイパン玉砕・レイテ敗戦以降本土への襲撃が濃厚となってきたため、政府は工場の緊急疎開を図ったのです。中部軍管区司令部の資料によると、近畿・東海・中国・四国地方に約二〇〇ヶ所の地下施設の建設が進められていたことが判明しています。そのうちの二ヶ所を紹介しましょう。

岬町多奈川に残る軍の施設

南海本線「みさき公園駅」下車

〝いずみ〟の阪南支所のエリア、岬町多奈川に目的のはっきりしないトンネルが二本あります。一九九〇年十月付けの新聞で「ここは戦時中、秘密兵器だった「回転」などの人間魚雷を配備しようとしたトンネルではなかったか」と報道したが、真相は不明です。

この多奈川には現在、埋立地に多奈川第二発電所があり、それを囲むように関西電力の巨大な施設が広がっていますが、その関西電力は戦時中ここにあった呉海軍建築部と川崎造船所の跡地に建設されているのです。そして現多奈川小学校の隣に大阪捕

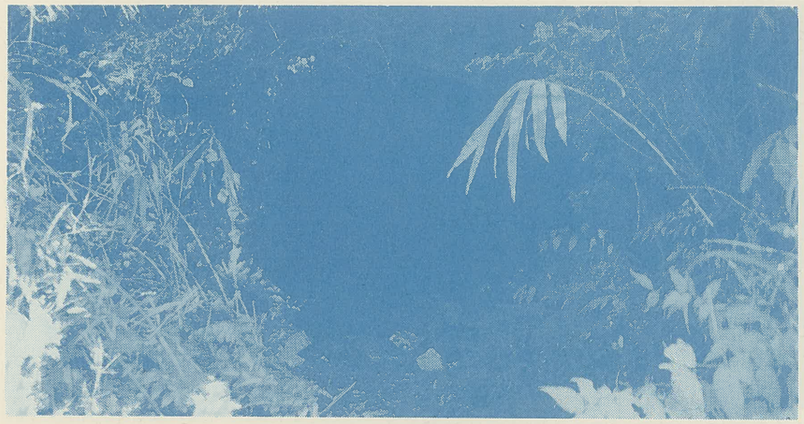
あった。仲間同士が命の黒パンを盗み合った。寸暇の間に盗むのだ。殴り合いもあった。その隙にパンを狙う奴もいた。遂に仲間同士の確執に及んだ。一寸した落ち度の揚げ足をとり、ソ連が最も嫌がる思想的な反動分子などと、仲間にソ連側の目を引き付けた。淡いランプの火影に故郷を偲ぶ目に、トンボ寝台の陰が、ユラユラ揺れていた。

この項を書く事を私は躊躇(ためら)った。が、事実を正確に書く事は民主主義の本旨と思い直して、敢(あ)えて書くのです。病院で多くの患者が死んだ。目を開き四肢を曲げ、虚空を摑み口をあけた遺体を、素ッ裸にして埋葬したのである。この一言で作業中に事故死した同胞が、どんな状態であったか、それは皆さんのご想像にお任せする。と言うのは病院で右の様子を見ているので、今も記憶に残っています。故意でないにしても、あまりに酷い。

舞鶴に上陸した晩、新聞社の方が野外で映画を催して下さった。たしか恋愛ものだったと思うが、映写中に仲間の一人が大声で、「我々はこんな頽廃的な映画を見るべきでない」と叫んだ。すると「同感」の声が各所に上がり「ワー」と喊声を上げて宿舎に帰ったのです。ソ連で仕込まれた思想は、良かれ悪かれこれに同調する事です。同調せぬ者は反動と見做され、面白半分に吊るし上げられるからです。吊るし上げとは台の上に立たされ、大勢の罵声や怒声を浴びせられる事です。つまりスターリンの粛清(しゅくせい)を真似たようなものです。私も喊声を上げて帰った一人ですが、人の好意を無にした事に、深く反省をしています。

謹んで戦争の犠牲者のご冥福を祈ります。

合掌



トンネルの入口

トンネル（④）

トンネルの高さは約2.8m・幅約2.4m・奥行きは約150m、仕上げはしていなくて、岩肌が露出したままです。

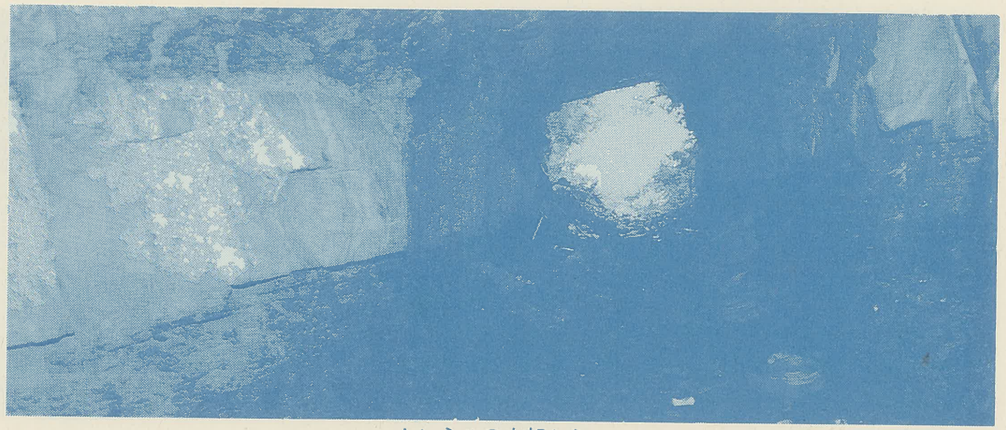
現在は「危険」の札が下り、一応入ってはならない様になっています。

戦争は天災ではない

久米田支部　植田　あい

私の生まれたところは大阪堂島。米の市のあった町で、お米の値が上がったとの呼び声や、堂島川を梅田貨物へ運ぶ舟の行きかう出入のはげしい町でした。中国人の床屋、ロシア人の洋服屋、朝鮮人の船頭さんらと共に平和にくらして居りましたが、支那事変・満州事変という様に、戦時色が強くなるにつれて此の人らもいなくなりました。大東亜戦争へと進み出すと、生活するのに、何かと疑問を口にすると「そんな事お上に聞こえたらこわいで」と、たしなめられる時代でした。

妹は三国の日本アルミへ、女子挺身隊として二年契約ではたらき、私も天六（天神橋六丁目）の環状線の近くの、国労会館の近くにあった軍需工場へ、曽根崎新地の芸者さんらと一緒にかよいました。ピンセットで鉄くずをより分ける仕事でした。見廻りの軍人から「国の為、女でも役にたつのだと誇りを持って一生懸命にやってもらいたい」と聞かされ、弟も十代の学生ら も国のためにと軍に志願しましたが、弟は「色盲」で落ちました。又着物の袖も、二尺の丈を元禄袖に切り、モンペに国防色すがたとなりました。その頃ラジオから流れ出る東海林太郎の『国境の町』に、戦地に征かれたあの人を思って、涙を流したことか……。赤紙が来て大阪城の二十二部隊に最後の面会に行って、そのまま、中支へ行かれ戦死されたのです。『三日花嫁』という新聞記事も珍らしくなくなりました。嫁入りして三日目に花婿さんに召集令状が来て、戦地へ行ってそのまま二度と帰らないのです。又電灯も黒いカバーをかぶせて、空襲警報が出たらまっ暗で、たよりはラジオの情報だけでした。父は町内の人と警備に走り廻り、どこへ爆弾が落ちるかわからない為、兄弟別れて壕（道路に穴を掘って五、六人入る）に入りました。



トンネルの内部から

どの家も空っぽになるのです。毎晩の様に続く空襲にとび起きて逃げなければならないので、服も着たまま靴だけ脱いで寝る毎日でした。

生活用品も取り上げられ、鉄びん・火消しつぼ（あかがね）・火ばし・母の指輪もなくなり、藤田公園や日本銀行（大阪市役所前）の芝生の鉄の鎖も取りはずされ、通天閣もこわされて、皆武器になってしまいました。出入橋電停前の西尾末広の診療所から、若い看護婦さんが次々と戦地へ送られるたびに、西尾末広が激励のあいさつをしていました。

大阪はあぶないので、兵庫県へ疎開することになり、鍋とお布団お仏壇を持って、逃げる様に田舎へ行きました。そして、その地の多木肥料会社の農機具を作る木工部で働きました。食事は大豆入りのごはんがうれしく、「家に持って帰り」とお茶わん一杯の豆ごはんを下さった友が忘れられません。不安とすき腹で、私も妹も生理が一年止まってしまいました。体にシラミをわかしても、衣料切符が無ければ下着も買えません。米軍機が低空で飛んでくる様になり、父が大阪から自転車で、お米を工面して（汽車に乗るとお米を取り上げられる）加古川まで運んでくるなり、力つきて急死してしまいました。その後母も、大阪へ帰るなり同じ年（二十一年）に急死しました。私ら子供四人は、父が焼跡に建ててくれたバラックで、不安なくらしがはじまったのです。あき地に植えたナスビもさつま芋もすぐにとられてしまい、芋のつるを食べました。疎開しておいてくれた私の着物を、一枚一枚天六へ売りに行き、お芋一貫目百円に変えて、歩いて帰りました（電車賃をしまつするため）。弟は堂島浜通りの大光商船に勤め、妹は中一組の土方仕事に行き、私は堂島大橋のはたの、米袋張替え工場で働きました。ぬか入パンを四人で食べ、三円で大根葉を並んで買ったり、肉が売っているからと買いに走り、後にそれが〝ネコ〟の肉だったことがわかりました。ひもじい暮らしの中で、突然弟が一週間の患らいで死んでしまい、その死ぬまぎわに「ビフテキが食べたい」と言ったので、中村屋へ行ったものの、「五百円」。あまりに高いので買えず、お豆腐を代わりに食べさせようと、お皿にいれたのを見ながら死んでしまいました。借金してでも食べさしてやりたかったと何度くやんだか…。「エサを手に入れることと命を守ること」だけの何年間でした。まったく動物同然です。

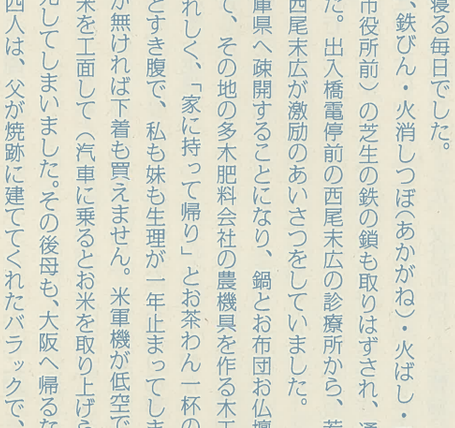
耳に残るのは「臨時ニュースを申し上げます。〇〇時〇〇分、潮岬南方より敵機数十機が〇〇方面に向かって居ります」というアナウンサーの声と、頭の上に爆音が聞こえると「早よ早よ逃げや」という、母の必死の声です。

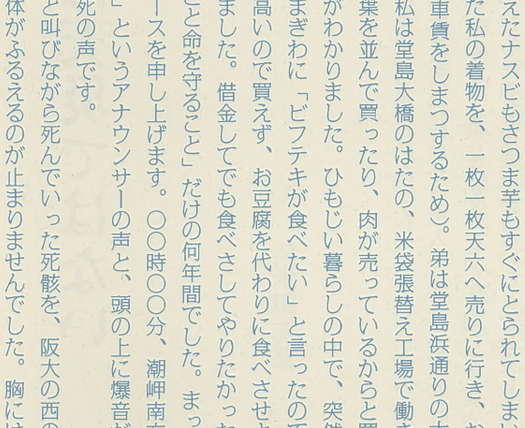
そして「水、水をくれ」と叫びながら死んでいった死骸を、阪大の西の空地でまとめて焼いているという話を聞いて、体がふるえるのが止まりませんでした。胸には血液型と住所氏名を書いた布を縫い付けて、どこで死んでもわかる様にしていました。

昭和二十年の空襲で、叔母もいとこも芝田町の防空壕の中で、爆弾が落ちて死にました。

空襲のあとの梅田界隈には大阪駅・阪急百貨店・中央郵便局・阪大病院・毎日新聞社・裁判所・中央公会堂・堂ビル・大同生命が焼け残っていました。あとは焼野が原で、まったく明日の事がわかりませんでした。ある日天満警察から、出て来る様にとの通知がありました。聞いてみると、ナスビやさつま芋を盗んだ犯人がつかまったから取りに来る様に、とのことでした。

『思い出すのもいやな戦争』『絶対に忘れてはいけない戦争』『戦争は天災ではない』と云う事を、全身に刻みつけて生きてきました。





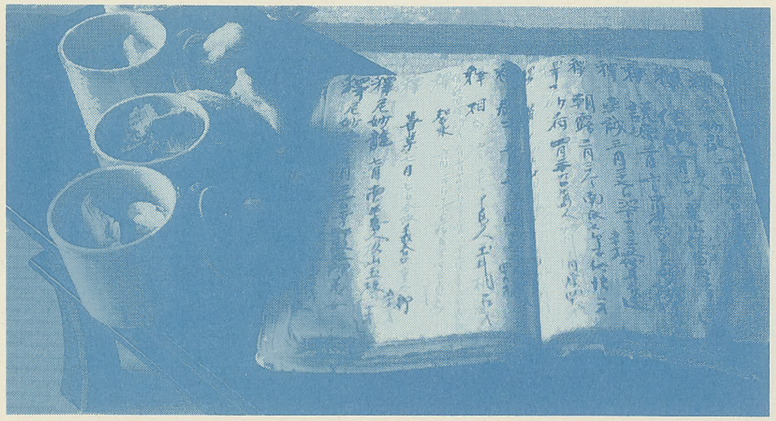
朝鮮人強制収容所跡（③）

「しなしなかきもち」で飢えをしのぐ

貝塚市　下津　敏子

三重県河芸郡栄村郡山。今は鈴鹿市となっているのでしょうか。ここにあります主人の実家をたよって、昭和十八年の暮から三才の息子を連れて親子三人移り住みました。

それまで京都市右京区西大路四条で、主人は友禅の紗張（しゃばり）の仕事をしていて、三人ばかりの職人さんを使って小さな工場を経営していました。紗を漆（うるし）で型紙に張るのですが、慣れていても漆でかぶれることもあって、大変な仕事です。あの美しい友禅からは想像もできませんが。戦時色一色に塗りつぶされてからは、漆が手に入りにくくなりましたし、雅な文化を持つ京都といっても、友禅なんて平和＝ぜいたく産業（軍需産業に対して）と非難され、工場を処分せざるをえなかったのです。でもモンペを強要されたそんな時勢でも、桁外れに身分の高いお金持ちからは、友禅の注文はあったのですよ。作れば売れる状態ではあったのですが、結局世間の騒々しさに負けてしまったのです。



正教寺（⑦）

正教寺に残る朝鮮人の遺骨と過去帳

強制連行されてきて、重労働に苦しみ、身寄りもなく故国に帰ることなく亡くなった人達の遺骨です。

過去帳には「半島人」という文字があります。

郡山は近鉄「磯山駅」から歩いて三五分。桃やみかんを産する、山また山の静かな村でした。その昔、主人の父が区長をしていた頃に国有林の払い下げがあり、各戸で開墾して、十八年には安定した収穫を得ていました。

実家の地所のひとすみに小屋を建て、三反の田・二反の畑を借り受け、親子三人自給自足の生活を始めたのです。家財道具は貨物車で京都から「下之庄駅」まで運び（料金は百円だった）か、大人の往復料金は五円でした、あとは牛車とリヤカーで運んだのです。知らない土地とはいえ、主人の生まれた土地だったし、両親はなくなっていましたが縁者はたくさんいらっしゃるし、雨露凌げる家もあるし、家財道具もあるし、耕せば食べ物には困らないし。不自由なことは多々あったけれど、疎開生活としては恵まれすぎるほど恵まれていたといえるでしょう。

しかし水には苦労しました。井戸からバケツに汲んで、何度も往復して台所のカメに満たすのです。蛇口をひねったら水の出る、水道のある生活に慣れた者にとっては、日常欠かせぬものだけに、ほんとうに骨身にこたえましたね。

空襲で逃げ惑っている方達からみたら、それこそ天国のような生活だし、ぜいたくをいったら申し訳ないのですが、私はやっぱりつらかったですね。慣れぬ田仕事のつらさよりも主人の縁者に対して気を使うことが多くて……間にたつ主人の気苦労は大変なものだったと思います。結果として寿命を縮めることになってしまいました……。

でも息子は同じ年頃の友達がすぐにできて、元気いっぱい野山を一日中走り回っていました。山の木も蛙も虫も、それこそ無限に遊び相手になってくれるのですものねえ。

お米はよくできましたが、供出しなければなりません。飯米として一日ひとり二合五勺。それを家族人数×一年分で計算して、残りを供出するのです。ウチなど僅かなものですが。食料として重宝したのは、やはりさつまいもです。（護国いもと呼びました）。保存の方法として、日当たりがよく水はけのよい山の傾斜地に横穴を掘って、すりぬか（モミガラ）を敷き、土をつけたままのおいもとわらを交互に積み、むしろ蓋をかぶせるのです。そのおいもでよく作ったのは「しなしなかきもち」と呼んでいたものです。粉にして小麦粉と混ぜ、砂糖を少し入れてこねて蒸すと真っ黒になります。なまこ型に丸めて薄切りにして陰干しにするのです。このかきもちは日がたっても柔らかなので、あの地方では「しなしなかきもち」と呼んでいたのです。子どものおやつには重宝しましたね。

昭和十九年の中頃から「買い出し」にくる人が目立ってきましたね。大阪から汽車に乗ってリュックをかついでやってくるのです。山道に列をなしていることもありましたね。ウチでも

大阪捕虜収容所多奈川分所（⑥）

フィリッピンの「コレヒドール作戦」の後、「バターン行進」を体験したアメリカ兵三〇〇人、オランダ人六〇人が収容されていました。トンネルの先端で堀削作業に従事。

一九四五年三月二五日「捕虜大移動」で兵庫県朝来郡生野町へ移りました。

余裕があれば分けてあげていました。お金よりも物、着物を持ってくる人が多かったですね。そんな人の中で今も記憶に残っているのは、大阪から何度かこられた二十七、八才の若奥さん風な人で、着物でお米に（もち米が多かったように記憶しています）に替えていましたね。銘仙一枚でもち米三升位替えてあげたのではないかしら？お茶を出してあげると「ここはええなあー。食べる物があって……」元気に遊んでる息子を見ていましたね……。

二四年に主人がなくなって大阪に出てきました。焼け跡があちこちにあるものの、街は活気にあふれていました。結局私は空襲の恐ろしさを経験しなかったわけですし、戦争の直接の被害は受けなかったのです。大変な被害を受けられた方達には誠に申し訳ないのですが、しかし京都の生活を棄てなければならなかった原因、いつ、どこへ疎開するかを選択、交渉しなければならなかった大変さ。平穏に暮らしている庶民の生活を破壊する戦争は大反対です。

（聞き書き）

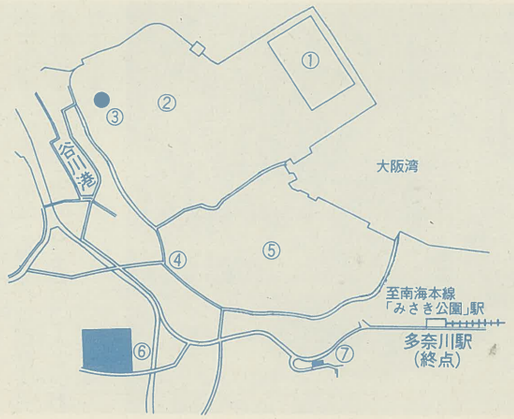
黒こげの死体をとびこえて

日下支部　八木　幾子

空襲といえば、忘れることのできない恐ろしい経験があります。大阪ミナミの千日前から、母の実家のある住吉区の粉浜まで、祖母の手を握りしめて逃げ延びたあの恐ろしい記憶は四七年経った今も忘れることはできません。

その空襲が昭和十九年であったのは確かなんですが、何月だったのか……。当時私は数え年七才、難波の精華小学校に入学したばかりの、ほんの子どもでしたので、忘れたり、まちがえたりしていると思いますが、お許し下さい。

午後八時頃、あの不気味な空襲警報が鳴り響き、防空頭巾をしっかり被って防空壕に逃げこ



①現多奈川第二火力発電所
②呉海軍建築部跡（現関西電力）
③朝鮮人強制収容所跡
④トンネル
⑤川崎造船所跡（現関西電力）
⑥大阪捕虜収容所多奈川分所
⑦正教寺
（資料は、阪南支所・平和委員会より）

み、家族やお店で働いていた人たちと、ひとかたまりになってふるえていました。ヒュッーとかドカンとかの耳をつんざくような音がすると、頭上からパラパラと土が落ちてきたり、壕の入口から熱をもった土煙りが襲ってくるのです。そして逃げ惑う人々の悲鳴や、消火活動をしているらしい警防団員の大声が聞こえたりします。「もうアカン！死ぬ！」と子ども心にも何度もそう思いました。おとな達もそう判断したのでしょう。「落ち着き先は粉浜！」と言い交わして、三々五々壕から走り出たのです。

その時祖母は六二才。私をとってもかわいがってくれた祖母でした。いつも優しい祖母が怖い声で「おばあちゃんの手離したらアカンえ！」と何度も言い、私も子ども心に「手を離したら迷子になる！迷子になったら死んでしまう！」と自分に言い聞かせ、祖母の手をしっかり握りしめていました。

あたりの建物がみんな燃えていました。日頃見慣れた建物が、ごうごうと燃え盛る炎の中で崩れていくのです。でもそれはほんの瞬間の光景であったと思います。なぜって火の粉が雨のように降りかかるので、目を開けていられないし、顔を伏せざるをえなかったから……男か女か見分けもつかない黒こげの死体を飛び越えたりして……。

大阪球場から国道二六号線に出て、ひたすら南へ南へ、小走りに走りました。国道二六号線には当時電車が通っていたのでしょうか、私の記憶では線路と石畳が続いていて、この石畳を走っていたら間違いなく粉浜に着く。と安心していた記憶があるのです。そして大国町のあたりまで来て恵比須町の方を見ると、もうすでに火は消えていて、一面の焼け野原になっていました。焼け残った建物の陰で腰をおろして、肩にかけた袋に入れていたカンパンを食べ、水筒のお茶を飲んで一息つきました。その頃には焼け跡の整理を始めている人達の姿も見かけるようになり、物の焼けた、本当に我慢できないいやな匂いがたちこめる中で作業していました。その中の一人の方の「あぶない！」という大声に、私と祖母は突然倒れかかってきた電柱の下敷きにならずにすんだのです。間一髪の危ないところでした。そしてとぼとぼと歩いて、粉浜の母の実家にたどり着きました。ばらばらに逃げた家族も皆無事に顔をあわせることが出来、千日前の店は灰になってしまいましたが、皆が無事だったことを喜びあいました。

母の実家は農家で、当時粉浜のあたりは畑や田圃がいっぱいある静かな在所でした。私は粉浜小学校にしばらく通いましたが、結局疎開することになり、又祖母と二人、遠縁を頼って兵庫県の豊岡という土地へ移りました。祖母はなんとしても私と離れることを拒んだのでしょう。本当にかわいがってくれましたから。

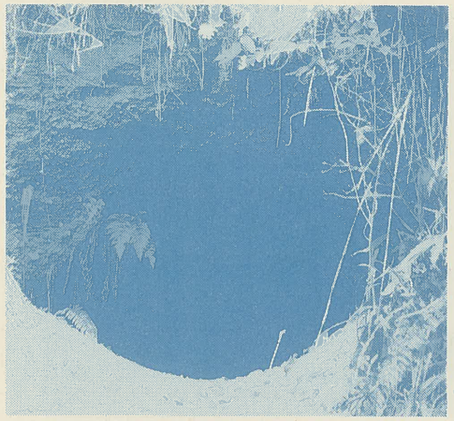
「タチソ」（高槻地下倉庫）

高槻市成合（なりあい）
（高槻市バス成合中町下車）

「タチソ」は高槻市北部の成合に建設されつつあった旧陸軍「高槻地下倉庫」の略称です。

戦況の緊迫から当初の目的である倉庫から軍需工場に変更され、神戸の川崎航空機を移し、飛行機の発動機の製造が計画されたのです。

動員された労働者は地元民をはじめ、高槻医専・北野中学校・関西工業学校などの学生。そして最も危険な部分には朝鮮人労働者が働かされ、その数三五〇〇人といわれています。


トンネル入口

やさしかった中国の人たち

春日丘支部　稲田　悦子

豊岡は畑や田圃（たんぼ）が豊かに広がり、きれいな小川が流れている穏やかな土地でした。東京や大阪では空襲で大きな被害が出ているなんて信じられない位。めずらしかったのは、柳行季の材料を水に晒している光景でした。あの小川も今はどうなっているのでしょうか……体ひとつで汽車に揺られてきましたので、大阪から柳行季三つを送ってもらったのですが、いっこうに届かず、調べてもらったら大阪駅で憲兵の検査があって、その後行方不明になってしまったことがわかりました。結局着たきり雀になってしまったのです。のら着を貰ったりして……情けなかったですね、惨めで……。大阪では「いとさん、いとさん」と呼ばれて、きれいな模様の友禅を何枚も何枚も持っていて、それはそれは大事にしていましたのに……いちはやく粉浜へ運んでいたので無事だったのに……。

『都会っ子』といっていじめられたこともありましたが、友達もすぐにできて、おなかがすくと畑に入って、トマトやさつまいもを小川でジャブジャブと洗っただけで食べたりしました。あとでじんましんに苦しめられましたが。

終戦後二年位たって粉浜に帰りました。

多くの人の命を奪い、生活を壊した戦争。失うものばかりの戦争で、何かひとつ得たものといえば、それは平和の尊さだったのではないでしょうか。

（聞き書き）

私は現在六六才です。昭和十九年の春から二一年の夏まで満州におりました。日本の敗戦後の混乱は思い出すのも辛いのですが、体験した者の務めと思ってお話いたしましょう。

渡満して、奉天省本溪湖市に住んでいました。主人が兵役の満期後に就職した満州製鉄の社宅があったのです。

土に埋れつつあるトンネル入口

主人との結婚は慰問袋が縁でした。私が美章園にあります大阪女子商業の四年生の時に送った袋の中の、私の手紙を主人が見て、文通が始まったのです。主人の休暇のたびに何度か逢って、十八年十二月に結婚しました。結婚といっても、家に親兄弟だけが集まって形だけ。モンペ姿で写真もないという、なんともお祖末な結婚式でした。

翌春、大陸へ渡りました。下関から関釜連絡船で釜山へ、あとは陸路を汽車で本渓湖へという行程でした。本渓湖に着いた日は雪が積もっていて、とっても寒かったのを覚えています。社宅はレンガ造り、日本の団地のように三階建ての棟が幾つも並んでいて、間取りも六畳が三間ありゆったりしていました。病院や配給所があって中国人が働いていました。給料は日本人の半分だったとか聞いています。

本渓湖はとっても美しい街でした。遅い春の五～六月には、ニセアカシアの真っ白な花が咲き誇り、街中が甘い香りに包まれるのです。満州は中国大陸の東北部にありますから冬は長く厳しいのですが、そのかわり夏はカラッとして凌ぎやすいのです。郊外にある小高い平頂山は蕨の名所で、近所の方達とよく摘みにいったものです。懐かしいですねえ。

二十年八月の敗戦は、まさに晴天の霹靂（へきれき）。気がついたら私達を守ってくれるはずの関東軍の姿がないのです。私達は住いを明け渡し、社宅の一部に詰めこまれました。

そんな混乱の最中、十月に長女が生まれました。社宅で産婆さんが取り上げてくれました。食料品等は小さい市場があって、中国の人達がいろんなものを運んできて、物々交換とか、お金があれば自由に買うことのできる状態ではあったので粟やコーリャンや卵など手に入れていました。

ソ連軍が入ってきたときは恐ろしかったですね。「絶対外へ出てはいけない」と厳命され、特に女性はひどい目にあうという噂が流れていました。そのソ連の兵隊達は満洲製鉄の設備を取り壊して、その機械などを汽車に積みこんでソ連に運んでいるという噂をききましたね。

二一年四月、私達の住んでいる建物の前で、将介石の率いる国府軍と八路軍との武力闘争があり、八路軍は破れて退却しました。八路軍は男とみればひっぱっていって危険な仕事をさせると、大変に恐れられたものです。そして国府軍の勝利のお陰で私達は帰国できることになったのです。自治会で決めてくれる順番に従って、百家族づつ位が一団となって行動するのです。親子三人、おむつとあるだけのお金を身につけて、列車で本渓湖から奉天へ、そして錦州引揚待機収容所に入ったのです。収容所というのは、粗末な屋根と板囲い、床は土で、旧日本軍の馬房だったのではないでしょうか。そこにどれだけの日本人が収容されていたのか、はっきりとはわかりませんが、二・三千人はいたのではないでしょうか。蓆（むしろ）一枚を敷いて、おとながが横になれるだけの空間を与えられて押し込まれていたのです。そして毎日五・六人が栄養失調などで息をひきとっていくのです。一才にもならない娘が栄養も足らないのに、よく生き延びられたものだと不思議な思いがします。収容所にいたのは夏、一カ月位だったと思います。夏だったから助かったのでしょうね。

そして葫蘆島の港から改造空母に乗りこみました。これで日本に帰れる、その嬉しさはたとえようもありませんでした。海に機雷が浮いているらしく、ジグザグに進んでいました。

四、五日間の船での生活で記憶に残っているのは、船内でなくなった人を水葬するときにならす音です。ポー・ポーと、なんとも淋しい汽笛の音……それを耳にするたびに、その方の無念さを、祖国を前にして海に沈む無念さを思って合掌していました。

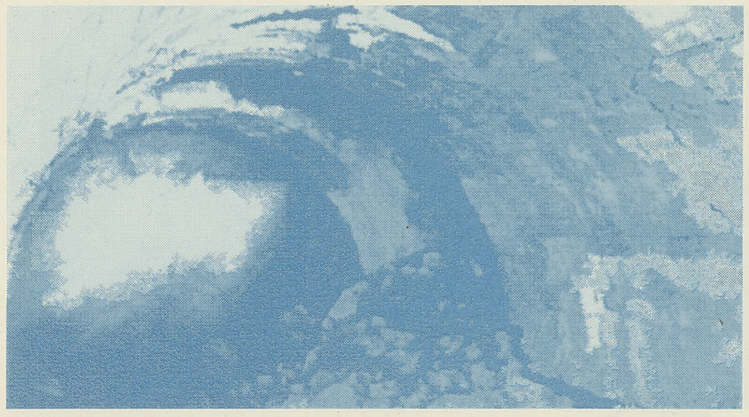
残留孤児の方達の顔は涙なしでは見れないですね。私達にも娘を預かってあげるという親切な申し出がありました。私の場合は若かったためか、絶対無事に帰れると確信みたいなものがあって手放さなかったのです。親が子を売るなんて絶対ありません。我が身が危ういから、せめて子どもだけでも生き延びさせようという親の心です。そして中国の人達は預かった子を我が子のように育ててくれたと思いますよ。孤児の方達の示す養父母を思いやる優しさがその証拠です。戦争という巨大な嵐に翻弄された敗残の民の悲劇です。こんな悲劇が二度と繰り返されませんように、心から祈りたいと思います。

（聞き書き）

トンネル内部

一六本のトンネルが碁盤目状につくられています。床面積は九三〇〇㎡。工作機二〇〇台が収容されるよう設計されていました。

敗戦により中断しましたが、八月二十日頃には生産が開始される予定で発電機と工作機四十台が据えつけられていました。



崩れつつある内部

今も思い出す敗戦の時

春木支部　田中　栄子

私は昭和十四年四月、満州四平で生まれました。二一年五月に引き揚げるまでを過ごしたのですが、残念ながら断片的な記憶しかないのです。丁度今両親が『造幣局の桜の通り抜け』見物に、山口から来ていますので話をしてもらいます。

栄子さんの実父・松岡　清さんのお話

わたしは八二才になります。農家の四男です。昭和六年、山口の萩で徴兵検査を受け、甲種合格となりました。九九人中四人だけが合格で、その夜宿で全員で祝杯をあげました。四人は床の間の前に座らされて「合格して良かった。立派に戦死できる」「はずれて命拾いした」とお互いに祝ったのです。父親は兄三人が乙種だったので喜んでくれましたなあ。

そして七年一月、杉の葉で飾った門をくぐり、村をあげての見送りの中を出征しました。

入隊先は広島騎兵第五連隊で、お城のすぐ近くにありました。私が騎兵とは皮肉な話で、子どもの頃から馬が怖くて近寄ったこともなかったのですから。私にあてがわれたのは『花村』という優しい雌馬でした。馬は「活兵器」と呼ばれ銃よりも大切にされ、まさに戦友そのものでした。九月、大阪城城東練兵場で挙行される昭和天皇の大観兵式に、私達の隊が選抜され、私は特に「馬取り扱い兵」に任命され、陛下の御馬、純白の『吹雪』を貨車から降ろしてホームに連れ出す役目を務めました。

八年の四月、下関―釜山―平壌―新義州―安東―奉天―赤峰と進み、そこで騎兵一万五千を擁する部隊、茂木少将を長とする旅団が編成されました。賊討伐を目的としています。勿論関東軍の一部隊です。毎日払暁作戦を繰り返しました。その最中に除隊になったのですが、満州が気に入って留まることにしました。関東軍の軍馬調教師として二年、その後資源開発調査班員として、金・アルミの資源を求めて全満州を歩きました。更に公主嶺にあった満鉄経営の農業学校で、乾燥農業―野菜の栽培について一年勉強しました。

そして四平に移り、百五拾円を借り（百円で立派な家が建った）二町歩の土地を買い、『四平街農場』と名づけました。そして事業を拡大するため温室を計画し、三千円の借金を、山口県人として親しくお付き合いをしていただいていた、四平市長・茶谷英次郎氏に申し込みました。「独り者には貸せない」と、氏の邸でお手伝いをしていた女性を紹介され、結婚と借金が共に成立することになったのです。（その女性が奥さま・ウメ子さんです。ウメ子さんは高等科を出て、岩国帝人で糸をかせにする仕事を四年して後、渡満して茶谷邸で働いていたのです。）

結婚は十三年春。二八才と二三才でした。十四年に長女誕生（茶谷氏が命名）。農園は順調にいっていたのですが、満鉄の社員寮建設のため立ち退きを命じられたので、土地を売り、国際運輸に就職しました。十六年に次女、十七年に三女、二十年に四女が次々に誕生しました。

ウメ子さんの話

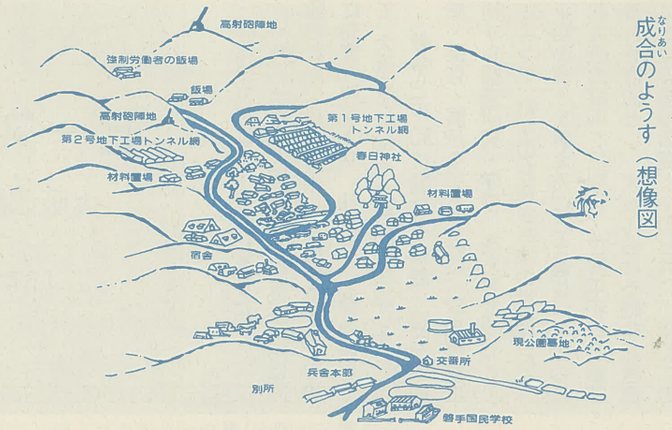
とたんに生活が不自由になりましたね。空襲がたびたびあって、そのたびに四人の子どもを抱えて防空壕にとびこみました。ソ連兵が入って来たときは怖かったですね。私は乳飲み子を抱えていたので助かりましたが、満鉄倶楽部の女性達は髪を切り男装していたとのことです。外にも出ず、戸や窓を板で打ちつけて閉じこもっていました。

以前お世話していた人が夜中に野菜をたくさんもってきてくれて、本当に助かりましたね。人情に変わりないんですね。本当に有難かったですよ。

そして二一年六月、隣組の十一世帯と共に無蓋車（むがいしゃ）に詰めこまれ、雨が降るとお鍋に受けたり、毛布を子ども等の上に広げたり、大変でしたね。荷物は着物何枚・下着何枚と制限があり、何度かチェックされるたびにめぼしいものは取られて……こどもがくるまっていたふとんまで取られました。でも私等何もいえないし……葫蘆島からアメリカの上陸用舟艇に乗ってフカの泳ぐ海を渡って祖国に帰ってきたのです。佐世保で三日間検疫で留められたんですが、そこで子どもさんを亡くされた方がいて水葬にしたのです。栄養失調だったんでしょうねえ。やっと日本に帰ってきたのに、かわいそうでみてられませんでした。私等も四人の小さい子連れて、よう無事に帰れたと思います。

残留孤児の皆さんの顔は涙なしでは見れませんね。もっと早く紹介されていたら……遅すぎますよ。私等は幸せです。帰国してからも四人の子どもが生まれ、全員独立し、孫が十六人いるんですよ。

トンネルが掘られている山



トンネル工事がやられているときの成合（なりあい）のようす（想像図）

栄子さんの話

ソ連兵が土足で上がり込み、飾っていたおひな様を奪っていったことがありました。子ども心に「なんでこんなひどいことを！」と悔しい思いをしたことを覚えています。

両親が元気なうちに、子どももいっしょに私の生まれた四平を尋ねたいですね。終戦の日に父が武器を使われないようにと、裏庭の塀の際に埋めた軍刀を確かめたいですね。

（聞き書き）

感謝をこめて 欠かさない月参り

向ケ丘支部　西口　多鶴子

私達夫婦は昭和十六年十月二十二日に結婚しました。三笠宮様の御婚儀と同じ日だったんです。今の家から少し離れた堺は神石市之町で主人の両親といっしょに住んでいました。その三ヶ月後、主人に臨時召集がかかりました。徴兵検査では第二乙種の判定だったので、意外な思いがしましたし、やっぱり兵役は免れられないんだなあ、とがっかりしました。

妻としては当然のことと覚悟はしていますし、どこの御家庭も大なり小なり同じでしたが、主人の留守を守るということも、並大抵な苦労ではありませんでした。二十年の七月の堺大空襲の恐ろしい記憶は、今も忘れることができません。義母と三才の長男と防空壕に飛びこみ、ふるえていました。B29の爆音・雨霰と投下してくる黄燐焼夷弾の音と光を忘れることはできません。何年か後、地下鉄に乗るたびに長男が目をつぶり、耳をおさえるのに気がつきました。地下を通ってくる電車のゴーという音がB29を思いださせ、反射的にそういう動作をしてしまうのでしょう。防空壕の中でどんなに恐ろしかったことでしょう……。

（多鶴子）

昭和十七年八月、丹波篠山連隊に陸軍二等兵として入隊しました。御存知の通り、軍隊では二等兵は最下位です。命令されるばかり、しごかれるばかりの日々でしたね。そこでは一個分隊七、八人で、八貫目（三十㌔）もある機関銃や銃を支える三脚・石を詰めた弾薬箱を交替で肩に担いで行軍するという演習を来る日も来る日も繰り返していました。篠山から福知山まで一昼夜ぶっとおしの行軍というのもあったのですよ。食事も二等兵は最低です。ごはんが米と麦半々なのは皆同じですが、おかずは結局まわってこなくて、てんぷらの衣だけというようなものや薄い味噌汁だけでしたね。

そして十八年八月宇品から巡洋艦「大淀」で出港、ラバウルを経て九月にソロモン群島のブーゲンビル島に上陸しました。一緒に出港した水上機母艦「日進」は撃沈され、全員助からなかったのです。ブーゲンビルは赤道直下、ジャングルで覆われた常夏の島です。その島で私達は唯の一度も連合軍と戦闘を交えることもなく、連日「陣地づくり」のためジャングルを切り開く作業を続けていたのです。マラリアなどの病気で倒れる戦友が多く、病原虫が最大の敵でしたね。

そして二十年八月の終戦は直後に知らされました。もう私達は敗残兵です。どう展開するかわからない自分達の運命に不安がいっぱいでした。とうとうオーストラリア兵に見つかり、直ちに銃を取られ、捕虜となったわけです。ファウロ島の収容所に移され、ヤシやビンロウジュの葉で屋根を葺いた小屋に収容されました。ここでやらされた仕事は残飯を棄てる穴を掘ることでした。食事はオートミールなどなので満腹感がなくつらかったですね。そしてここでもマラリアや潰瘍などの病気が蔓延して、戦友がどんどん倒れていきました。そんな、あまり希望の持てない捕虜の生活でしたが、娯楽の時間というのがあって、唯一羽目のはずせるひとときでした。お互いに隠し芸を披露するのですが、私は浪花節が大好きで、特に広沢虎造の『森の石松』が十八番なので、皆の前でよくうなったものです。評判が良かったんじゃないかなどと自画自賛しているのですが……。

二十一年になって、どうやら帰国できそうだという可能性が出てきた頃、とうとう私も潰瘍になり、歩けなくなってしまいました。そしてやっと帰国の許可が下り、第一陣は衰弱が激しい者、第二陣には私も入ることができ、改造輸送艦「日昇丸」で、忘れもしません二月七日浦賀港に着きました。その時の私の体重は三十七キログラム、衰弱が激しく、上陸後直ちにトラックで第三陸軍病院に送られ入院しました。やっと退院し、実家に帰ったのは翌二十二年六月のことでした。四年に及ぶ軍隊生活がやっと終わったのです。共に宇品を出港した戦友の内、十人中八人が再び祖国の土を踏むことなく、南海に散ったのです。多くの前途有望な青年の命が無くなってしまったのです。

ピースおおさか

大阪国際平和センター

大阪城公園内

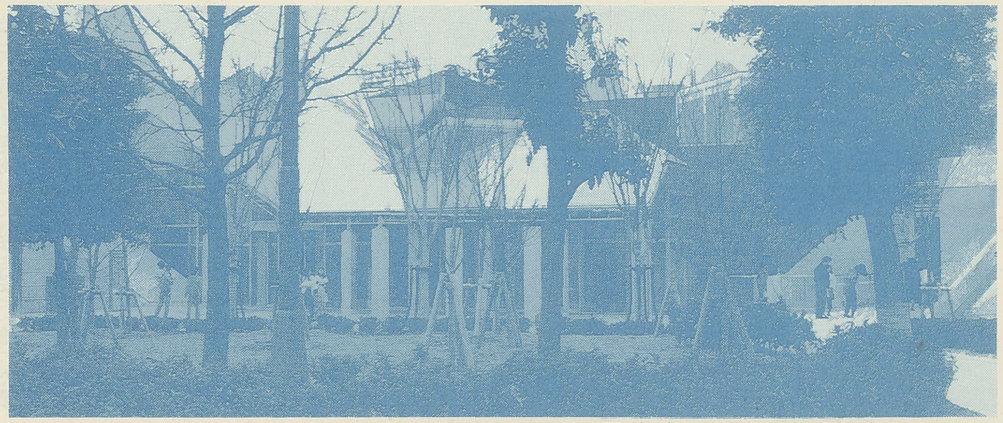
ＪＲ環状線「森ノ宮」駅下車

徒歩５分

昨年の九月にオープンしました。

一九八一年に大阪府社会福祉会館内に開設された「大阪府平和祈念戦争資料室」を更に充実・発展させ、独立させた資料館として、大阪府と大阪市が共同で建設しました。

『戦争と平和に関する情報・資料の収集・保存・展示を図ると共に、平和問題に関する調査研究・学習・普及等を図ることによって、戦争の悲惨さを次の世代に伝え、平和の尊さを訴えることを通じ、平和の首都大阪の実現を目指し、世界平和に貢献する』を目的とし、大阪における戦争被害者に対する追悼の場であると共に、平和にむけての新たな地域的な取り組みをめざしています。



ピースおおさか全景（大阪城公園から）

出征の時、妻が持たせてくれたのが、千人針とお百度をして受けた『葛の葉神社』のお守りでした。その御加護で助かったのだと信じています。ですから、そのお礼のつもりで今も月参りを欠かさないんですよ。

（種明）

（聞き書き）

命の恩人と兄弟のように今も

富田林市　鈴木　兼吉

昭和二十年八月十五日海南島で終戦を迎えた。

当時は軍票の使用も可能でしたが、敗戦後物価は日々高騰を続け、住民の暮しにも多大の影響が出始めました。軍隊では何時もの通り六日に一回の外出も許可され、我々は街に出て遊び又美味しい物も腹一杯食べる事が出来た。俸給は終戦と同時に停止になり、お金は一銭も頂けません。兵隊は私物品や色々な物を売って金に替えて小遣いを作ります。又軍票回収の意味から軍も黙認の形でその金を野戦郵便局で貯金をしたり使ったりします。

当時は、野戦郵便局では軍票での貯金は何時でも受付けてくれました。その時貯金をしていたお陰で、復員後三回に分けて払出しを許され、終戦後の新円券の不自由な時代に大変助かりました。

或る日、指揮官と砲台に一部の兵隊を残し、他全員本部のY司令官（第十五警備隊々長海軍大佐）の親衛隊に編入され、警備に付く事になった。司令官は温厚な海軍士官で軍人に似合わぬ優しい人だった。

司令官と私との最初の出会いは、白鷺砲台に転属して間も無い頃、初めて公用使として本部へ行った時だった。最初は準士官室へ入った。砲台に用事の有無を尋ねる為で、準士官（海軍兵曹長を言う）が一、二名居たが「用事なし」。次は士官室で、此処は面倒だから気を付けよと先任下士官から注意をされていた。室内に入って、官等級姓名を名乗った。四、五名の士官（海軍少尉から以上の将校を言う）がいて、中の一人が声が小さい「基い」と叱られいい直しをさせられた。それに初めての公用使で心臓がドキドキしていた。次は司令官室だ心臓の動悸は止らないビクビクして司令官室を訪ねた。

司令官は机に向かって何か書き物を一生懸命にしていられたが、声を掛ると、わざわざ私の方へ向きを変られ、私の顔を見て「用事なし御苦労」と労りの言葉を掛けてくれた。その一言で私の張り詰めた緊張も一度に解けた。それに引換へ、他の士官連中の威張った態度に腹がたった。外の士官と全く違う司令官の態度に感銘し、上に立つ人は違うなと思いました。優しい立派な司令官で、この人の為なら死んでもよいとさえ思った。以来私は司令官に対して尊敬と信頼を持つ様になり、他の士官連中は威張りくさって、兵隊を消耗品としか考えていない。司令官は一水（海軍一等水兵）の私でも大切に取り扱ってくれた。二年前の司令官との出会いを思いだし、喜んで親衛隊に参加した。それ以後は、司令官の警備兵として司令官を守り、隊外にでる時も片時も警備の任務から離れなかった。

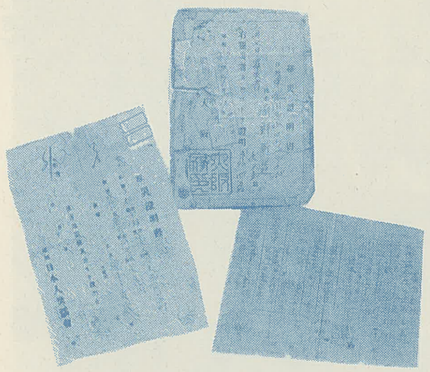
其の後、派遣隊分遣隊の食糧輸送の警備兵として、第十五警備隊の各隊を廻った。又司令官は終戦処理の打ち合せの為、隣接部隊の司令官を尋ねられた時、警備隊長からトラックの一番車の軽機関銃の射手を命じられた。残念ながら、私は砲台ばかり勤務していたので、恥ずかしい事だが軽機関銃の操作は知らない、持った事も触ったこともない。しかも下士官（海軍二等兵曹から以上を言う）に進級しながら射て無い、知りませんとは言えない。「承知しました」と、早速軽機関銃を担いで、一番車に乗込んだら皆安心して後を追って乗込んで来た。少し不安で心配だった。まさかの場合引金さえ引ければ弾は出る。後はどうにか成ると決心し、大胆な気持ちになった。見張の兵隊も、厳重に配置に着いているから安心して警備の任務に着いた。途中敵さんに遭遇しない様にと心に念じ祈った。行きは無事、何事も無く目的地に着き、一泊して翌朝同じコースを経て帰路に着く。途中何事も起らず、文昌地区まで帰って来た。ここは治安の維持も良く、ここまでくれば一安心と急に腹が空いて来た。警備隊も少休止したので、バナナ一房（十五、六本は付いていたかな……）全部一度に食べ、腹も満腹で、海軍本部に帰ったが、その夜高熱が出て胃が痛み出し、胃痙攣を起こし倒れた。本部には終戦後軍医も看護婦も海軍病院へ引揚げて本部には居ない。薬も無い。一晩中苦しみました。其の時、大英山砲台当時の戦友K君が薬が無ければ氷で冷したらと言って、主計兵に頼んで氷をもらい、雨具の頭

この三枚の色あせてぼろぼろになった紙片――これは「罹災証明書」なのですが、大きさも様式も、ばらばら。そして、何かの用紙の裏を利用したものもあります。

本来、役所の発行する書類は、規格が決まっているものですが、当時は、そうは言っていられませんでした。もう、五十年近い昔のことです。決して忘れることのできない思いの込められたものとしてたいせつに保管されていたのです。

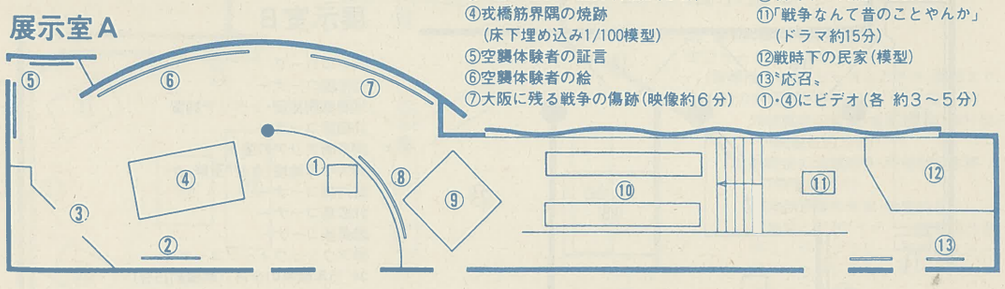
もう、あんな目に二度とあいたくない――戦争を知らない世代に、戦争体験を正しく伝えるためには、〝もの言わぬ資料〟に語ってもらわなければなりません。

「ピースおおさか」の展示は、それらの実物資料によって、歴史を証言します。



罹災証明書

展示室案内



の三角の覆に氷を入れ、一晩中胃を一生懸命に冷してくれた。戦友の手厚い看護のお陰で命拾いをしました。友の情が身に染みて、嬉し涙が出て止まりませんでした。異国の空で病に倒れた時程、侘しい事はない。外に沢山の人達も居たが、終戦後は人の心も変り他人事ではなく、自分の事でお互いが精一杯なのです。K君こそ私の命の恩人です。その命の恩人のK君と、復員後二十年振りに再会を致し、現在も尚兄弟の様に交際を続けております。

一銭五厘の命

東羽衣支部　岡本　輝雄

「おまえたちの命は一銭五厘だ。馬を買うのには金がいる。だから、おまえたちの命より馬のほうが大事だ」

これは、かつての軍隊生活を送った人々には、何度となく聞かされた言葉である。郵便葉書が一銭五厘であった時代、兵隊はこの葉書でいつでも召集できるといわれた。徴兵制度であった時代は、誰もこの召集から逃れることはできなかった。そして実際に兵隊たちの命は粗末に扱われていた。

昭和十八年三月から二十年三月までの二年間、私は東満の林口（りんこう）に駐屯の、山砲（さんぽう）第十五聯隊（通称八七一部隊）で過ごした。その間、部隊ではつぎのような事件があった。これらはどこの部隊でも日常茶飯事のことだと聞いたが、私の脳裏からは消し去ることのできない事件である。

殴り殺された初年兵

早朝、非常呼集で部隊全員が営庭に並ばされた。部隊長が訓示する。

「昨夜〇〇中隊の兵が病死した。流言飛語が流れているようであるが、けっしてそのようなことではない、惑わされないように」

だが、私たちの中隊にはすでにその噂は伝わっていた。昨夜、その中隊では夕食後、例によって古年兵による初年兵いじめがはじまった。とにかく、その陰湿さは経験した者でないと、想像もつかないものである。まともな神経の持ち主ほど耐えられない。

いじめられていた初年兵の一人が、ついに耐えきれなくなって抵抗した。腕力が古年兵よりも強かったので、古年兵が負かされた。それをみた他の古年兵が、一斉にその初年兵を襲った。そして、その初年兵が息絶えるまで、殴る蹴るの暴行はつづけられた。

中隊の下士官や将校たちはそれを知っていても、よくあること、と知らぬふりをしていた。殺された初年兵は病死として片付けられたが、集団暴行殺人をした古年兵に対する処分は、なにも行われなかった。

軍刀で切られた兵隊

昭和十八年秋、私が幹部候補生として訓練を受けていた頃のことである。演習が終わり夕食前、古年兵たちは部隊の端にある風呂場へ行き、入浴を終えて帰りかけていた。兵隊たちの一番気の緩むときである。

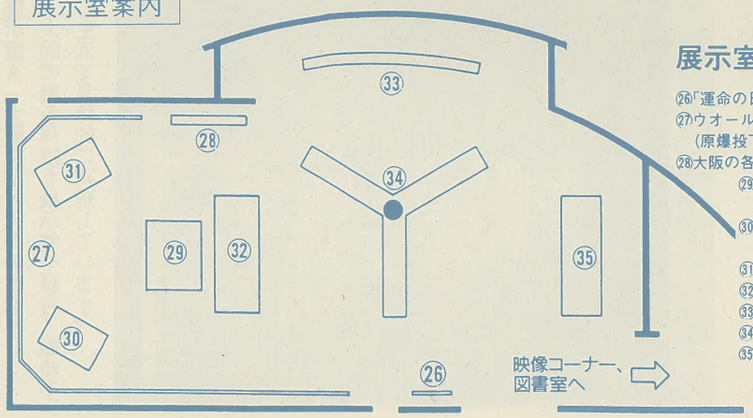
たまたまその兵隊たちの前に、酒に酔って乗馬した、隊付きの少尉がきた。どの中隊にも一名、陸軍士官学校を出たばかりの少尉が隊付きでいた。年齢はみな二十歳前後で、古年兵たちからは馬鹿にされていた。

私たちの中隊にもいたが、ショウハイ（中国語で子供のこと）というあだなであった。それでも将校と出会うと、兵隊は止まって敬礼をしなければならなかった。だが、酒に酔って落馬しかけた将校に対し、古年兵たちは敬礼する前に笑ってしまった。

腹をたてた将校は馬を降りるなり、軍刀を抜いて切りつけた。油断していて逃げ後れた兵隊の一人が斬られて重傷を負った。それはすぐ部隊中に知れわたったが、部隊長からの処分は斬られた兵隊だけにあった。

理由は将校と出会って敬礼をしなかったからで、それを咎めて斬りつけた将校の行為は正しいということであった。その将校とは私は、終戦のとき同じ部隊にいたが、すでに大尉に昇進

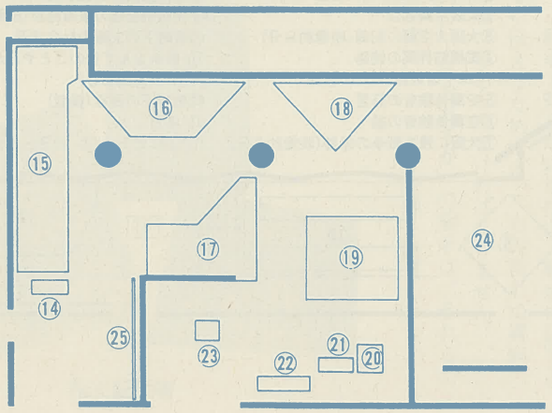
展示室案内



展示室B

⑭プロローグ
⑮中国コーナー
⑯満蒙開拓団・シベリア抑留
⑰朝鮮コーナー
⑱東南アジアの国々
⑲太平洋地域（なぜ〝玉砕〟か）
⑳沖縄コーナー
㉑広島コーナー
㉒長崎コーナー
㉓アウシュヴィッツコーナー
㉔「15年戦争の歩み」（映像約15分）
㉕エピローグ
　⑰、⑱、⑲、⑳にそれぞれ解説ビデオ
　（各約3～5分）

展示室案内



展示室C

㉖「運命の日の時計」
㉗ウオールアルバム
　（原爆投下から「ピースおおさか」開館まで）
㉘大阪の各自治体の平和への取り組み
㉙核戦争の脅威・核軍縮への取り組み
　（映像各約5分）
㉚戦後の地域紛争・局地戦の推移
　（映像約3分）
㉛地球環境の未来（映像約5分）
㉜地球と平和（イメージ映像約6分）
㉝ミニライブラリー（平和ポスター）
㉞メッセージテーブル
㉟ピースメッセージ
　（モニターテレビ約25分）

していた。

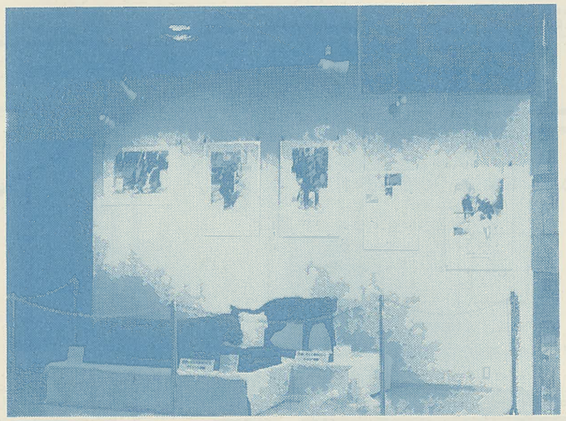
その部隊は東満国境であったので、ソ連軍からの攻撃を受け、終戦も知らず広野をさまよった。三千人あまりいた隊員のうち帰還したものは七百人ほどしかいない。そのため私は、たびたび復員業務をしている事務所から、調査のため呼び出された。その将校も帰還していて、よく顔を合わせたが、彼は自衛隊の幹部になっていた。

火砲慰霊祭

実弾発射演習をしていたとき、擬装網が砲身に吸い込まれたのを知らずに、発射したところ砲身の中で弾丸が破裂した。大砲が壊れ、兵隊も死んだ。

だが、死んだ兵隊は病死かなにかで片付けられ、壊れた火砲に対しては盛大な慰霊祭が行われた。銃や大砲などの兵器は、天皇陛下から下賜されたものであるから、兵隊の命より大切だということであった。

一銭五厘の兵隊の命より、大事に扱われたこれらの兵器も、欧米軍と戦ったときには、何の役にもたたなかった。彼等の新しい兵器の前に、時代後れの日本軍の兵器は、使いものにならなかった。使えたのは無抵抗の中国人に対してだけだったようである。



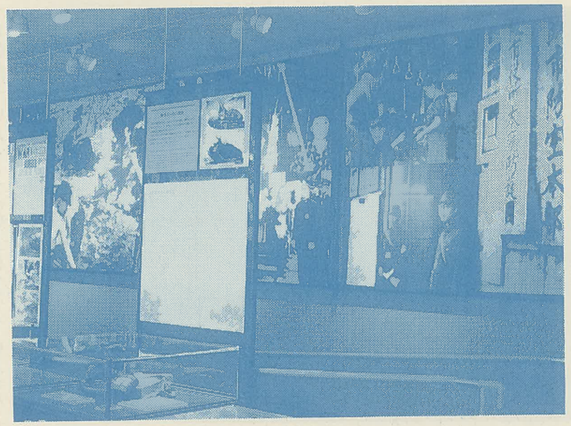
展示室A「大阪空襲と人々の生活」
大阪の戦争体験を展示物や証言・戦時下の生活を具体的に再現しています。

私は見た比島死の行進

羽衣支部　吾妻　正三郎

昭和十六年十月十五日、当時二十四才の私は大阪四師団隷下、西部第二十三部隊第二機関銃中隊に、補充兵の教育召集として入隊した。教育召集は普通三ヶ月間〝兵〟としての基礎訓練を終え、一期の検閲の後、召集解除されるものときいていた。だが同年十二月八日の日米開戦をひかえ、一触即発の険悪な国際情勢を理解する力は、当時の私達にはなく、ただ三ヶ月の教育訓練期間がすぎれば、召集解除され帰宅出来るものと信じていた。だが当時既に、日本軍の中国への軍事侵略が、満州事変から日中戦争と進展し、新聞やラジオでは、中国各地で日本軍の成果を華々しく報じていた。私の周囲からも、友人知人が数多く召集され、中国各地の戦場に狩り出されていった。が私達には、それらがその後米英に対する大戦争に進展するなどとは露知らず、ひたすら三ヶ月後の召集解除を願っていた。

十二月八日早朝、非常呼集のけたたましい不寝番の声にたたき起こされ訳もわからないまま舎前に整列、中隊長の指示を受けた。古年兵は機関銃に実砲銃身をつけ、附近のビルに在比米空軍の空襲に備え出動していった。時間がたつにつれ、私達にも重大な事態の理解も出来てきた。日米が開戦したらしい。当日は私達初年兵の一期の検閲のため、府南部信太山野営演習地に出発する手筈であった、慌しく出動していった古年兵たちが、敵空襲なしということで帰営してきた。しかし、皆緊張した面持である。そんな中で私達初年兵は信太山に出発した。府道十三号線を南下する沿道には新聞、ラジオで開戦を知った市民たちが、手に手に日の丸の手旗を振って、兵隊さん兵隊さんと歓声を送ってくれる。しかし私達にはそれどころではなかった。完全武装とはいかないまでも、いままで装着したことのない武装をし、長途の行軍に対する不安、仮兵舎での野営の不安、検閲とはどんなものかとの不安が重なり、暗たんたる気持ち



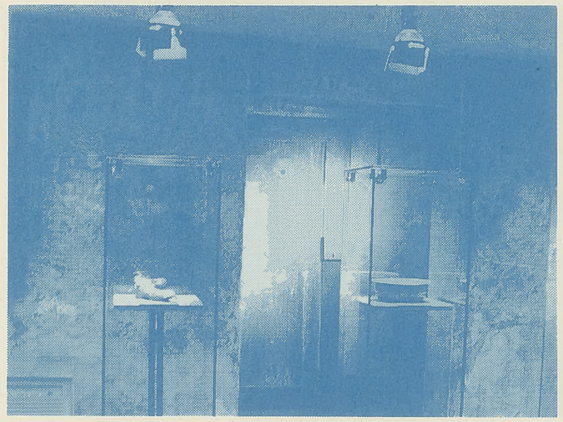
展示室B「十五年戦争」
満州事変から太平洋戦争終結まで、十五年にわたる時間的な推移、アジア・太平洋地域を中心とした地域戦争の拡大などを示し、日本の加害者としての側面をも明らかにしようとしています。日本による侵略戦争の実相と原爆の悲惨さ、恐ろしさなどを取り上げています。

であった。最大の不安は、これで召集解除などフッ飛んでしまうという絶望的な不安であった。そんな中で検閲も無事終り帰営したが、案の定私達の不安は的中し、直ちに臨時召集に切り替えられ、外地に送られることになった。翌年一月上旬中国上海近郊、江湾鎮に駐屯する、四帰団隷下二十三部隊の外征部隊に編入され、南方派遣のための敵前上陸訓練が待ち構えていた。旧日本軍の初年兵に対する古年兵の残虐な仕打ちは、すでに諸処で文書になったり映画その他で周知のことなので省略するが、今思い出してもぞっとする思いである。

二月中旬、中国上海嗎淞港浜頭のきびしい寒さの中で、南方向け夏衣袴をまとった私達は、寒さに打ふるえた。当初私達の行先が、仏領印度支那（今のベトナム）と知らされ、それに対処する訓練心構えを教育されていたが、数日の航海の後、着いたところは比島リンガエン湾というところであった。このころになって、私達初年兵にも、序々に私達をとりかこむ事態が呑みこめてきた。太平洋戦争緒戦の電撃作戦で、比島はマニラ市に無血入城し一段落していたが、マニラ湾口を扼（やく）すバタン半島コルヒドル島に米比軍が立こもり、日本軍艦船のマニラ湾航行に障害を与えていた。比島（フィリピン）派遣軍司令官本間雅晴中将が、軍中央から叱責された苦慮の中にあった。この事態を打開するため、増援部隊として、私達が急拠輸送されてきたのである。比島作戦の一番の難敵は、敵兵でなく、熱帯特有の熱病マラリアであった。予想をはるかに上る患者のため作戦行動がとれなくなり、戦争中は、自軍からは批判され、又戦後の戦争裁判では、捕虜虐待その他の罪で絞首刑を宣告され、絞首台の露と消えられた。その戦犯裁判起訴された訴因が、マラリアに起因する「比島死の行進」である。私は偶然その行進を目のあたりに見た。バタン攻略戦にわけも解らぬままに参加、行軍につぐ行軍に疲労困憊の後マラリアに罹（かか）り、野戦病院に収容され、マラリア特有の高熱に意識朦朧として数日過ぎた或日、一ヶ中隊中二十数名のマラリア患者中、私一人が前線から後送されて来たトラックに、乗車することが出来た。炎熱焼くが如き太陽にあぶられながら、無蓋の荷台に積みこまれて、マニラの陸軍病院に向う途中、同乗の病兵のざわめく気配に何事かと道路を見ると、バタン半島に立篭り日本軍に抵抗したが、日本軍の猛攻に杭しきれず日本軍に降伏した捕虜の列である。それがあまりに多数のため、現地では処理出来ず適当な地域に集結のため、移動させられている隊列であった。私が車上から高熱のため虚ろな目で眺め、捕虜たちは紺色一色の気軽な服装で、勿論銃器類などは一切持たず、ところどころ日本兵の監視を受けながらぶらぶらとまるでハイキングでもしているかのようで、これが後日死の行進として、世界の指弾を受けるなどとは思いも及ばなかった。この逆路を完全武装重装備で息絶えだえ行進してきて、マラリアに罹り高熱に喘ぎながら車上から

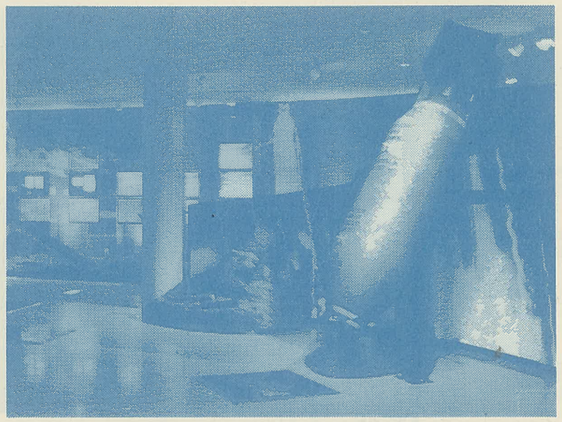
展示室C「平和の希求」

現在の国際情勢、様々な地球の危機についての展示。過去の反省に立った上で、現在の日本を世界の中に位置づけ、平和がいかに危ういバランスの上に立っているか、私達に今何が出来るかを問いかけています。



ながめていると、私には何と気軽なものと映った。勿論熱帯瘴癘（しょうれい）の地であり、日本軍同様捕虜達にも、マラリア患者が多数出たに違いない。日本軍側にはそれなりに医療施設があり、現に私がそれにたすけられ、命をとりとめたが、捕虜達にはそれ程の処置が出来ず、不本意ながら多数の死者を出す結果になったのではないかと思惟（しい）される。

その責任をとらされて、戦後の戦争犯罪人を裁く法廷で、絞首刑を宣告された本間雅晴中将が、その責に殉じ絞首台に登られた心境は、察するに余りある。その法廷に証人に立たれた中将夫人が、自分の夫の人柄について、もし自分の娘から自分の夫にどんな人がよいかときかれたら自分はためらいなく「夫雅晴」みたいな人を選べと述べられて、満廷寂として声がなかったと何かの本を読んだ私は、泪滂沱（なみだぼうだ）を禁じ得なかったと思い出がある。しょせん戦争は幾多の悲劇を生む、これに勝る罪悪はない。日本には戦後これらの贖罪（しょくざい）の意味をこめて、憲法第九条で日本は軍備を持たない、戦争はしないと銘記している今、ＰＫＯで国際貢献などと自衛隊の海外派遣を認める法案が国論を二分しながらも、自公民賛成で衆参で可決された。日本はかつてきた道を、又歩もうとするのか。在野の私達は澎湃（ほうはい）と湧きおこる平和勢力を結集して、最後まで反対のために闘おう。



敷地二千五百㎡という広さをもつセンターは展示室の他にホール（三百人収容）・会議室・映像コーナー。図書室などが設置されていて、「戦争と平和」に関する、多岐にわたる学習の資料を提供してくれるでしょう。